どんこう れっしゃが とまります

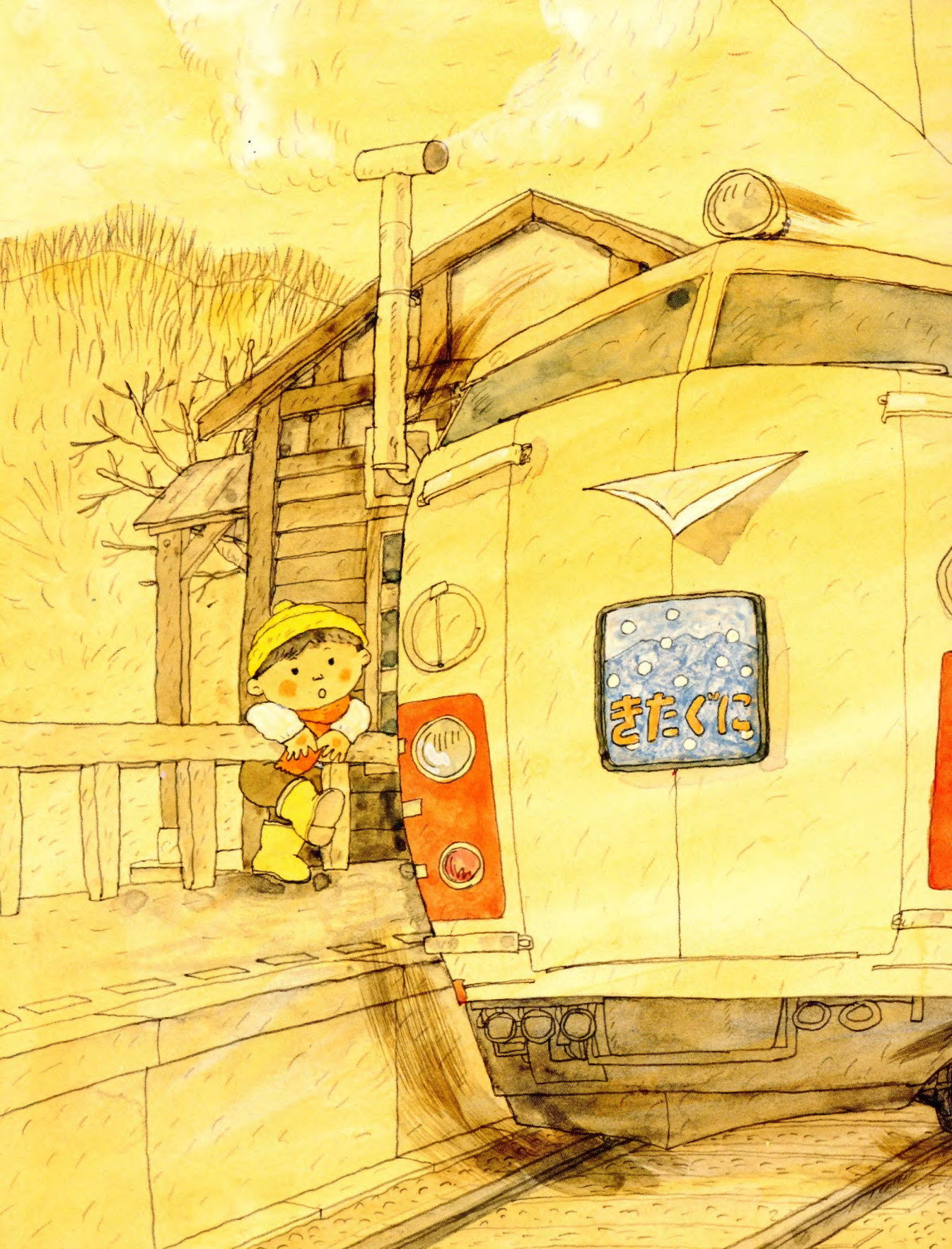
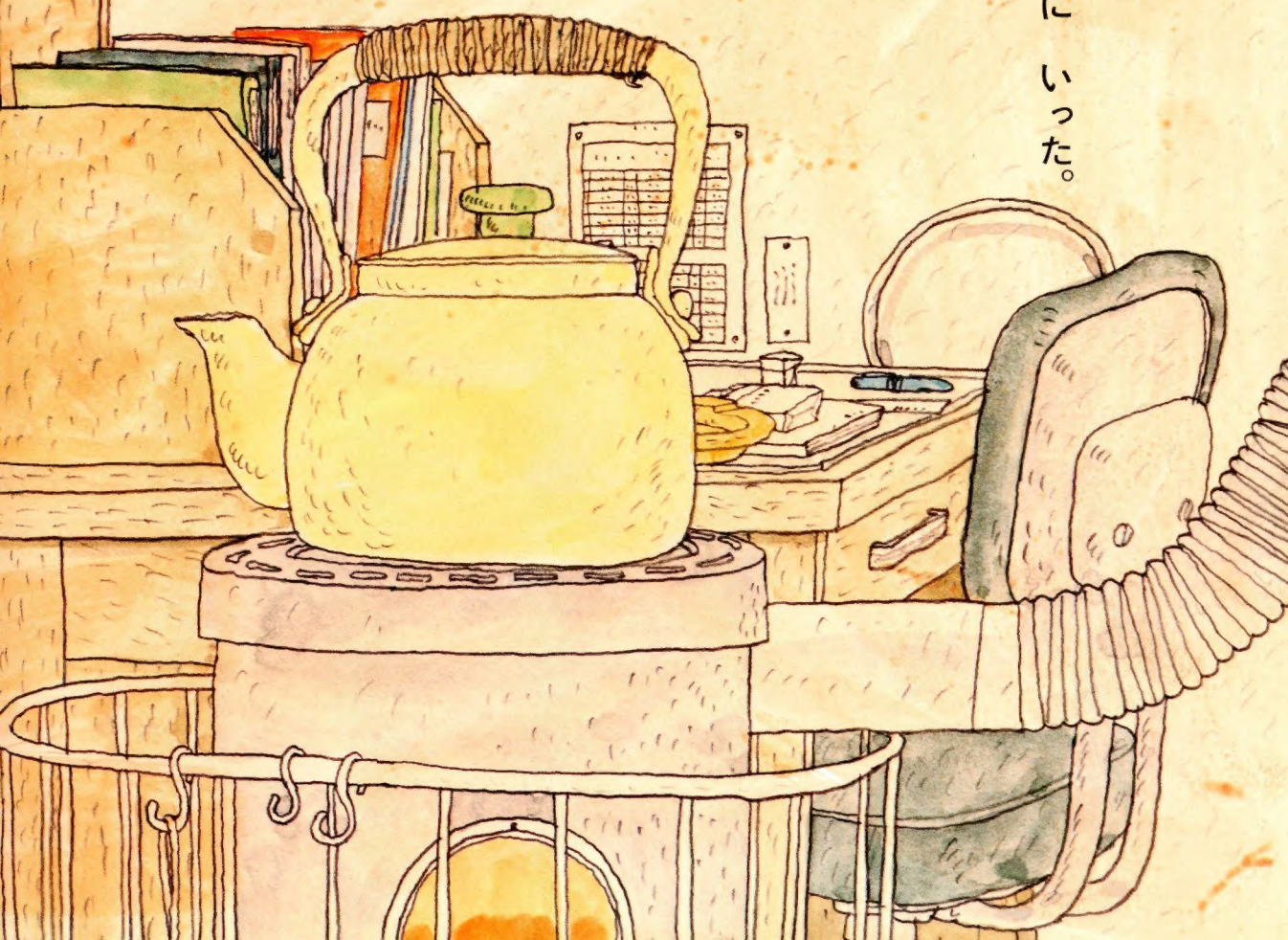
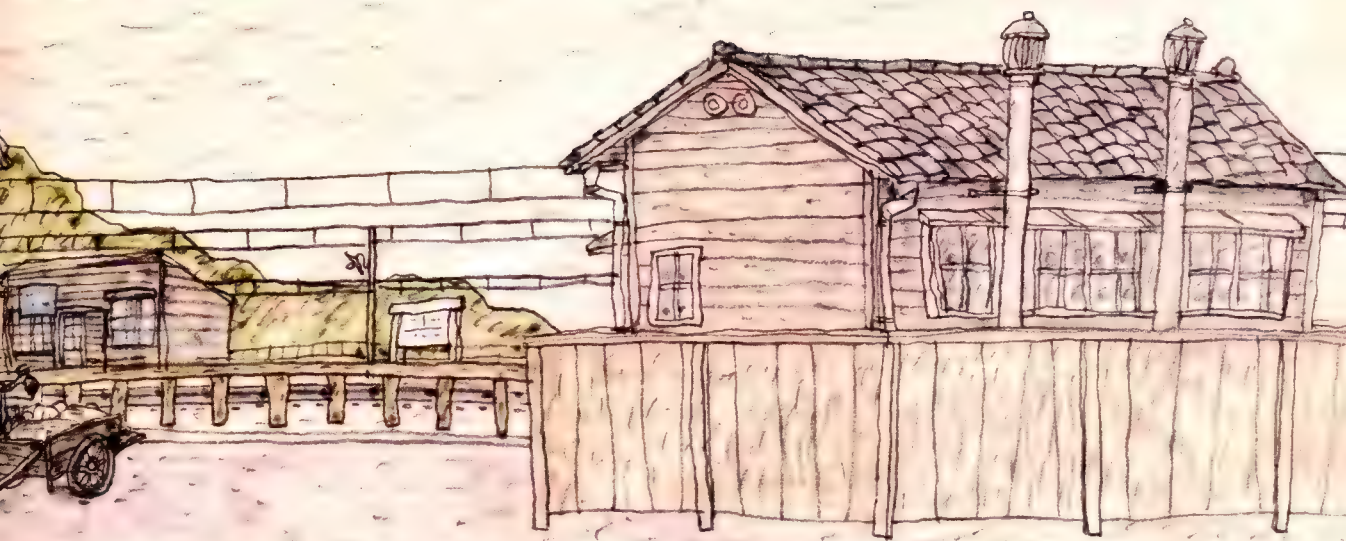
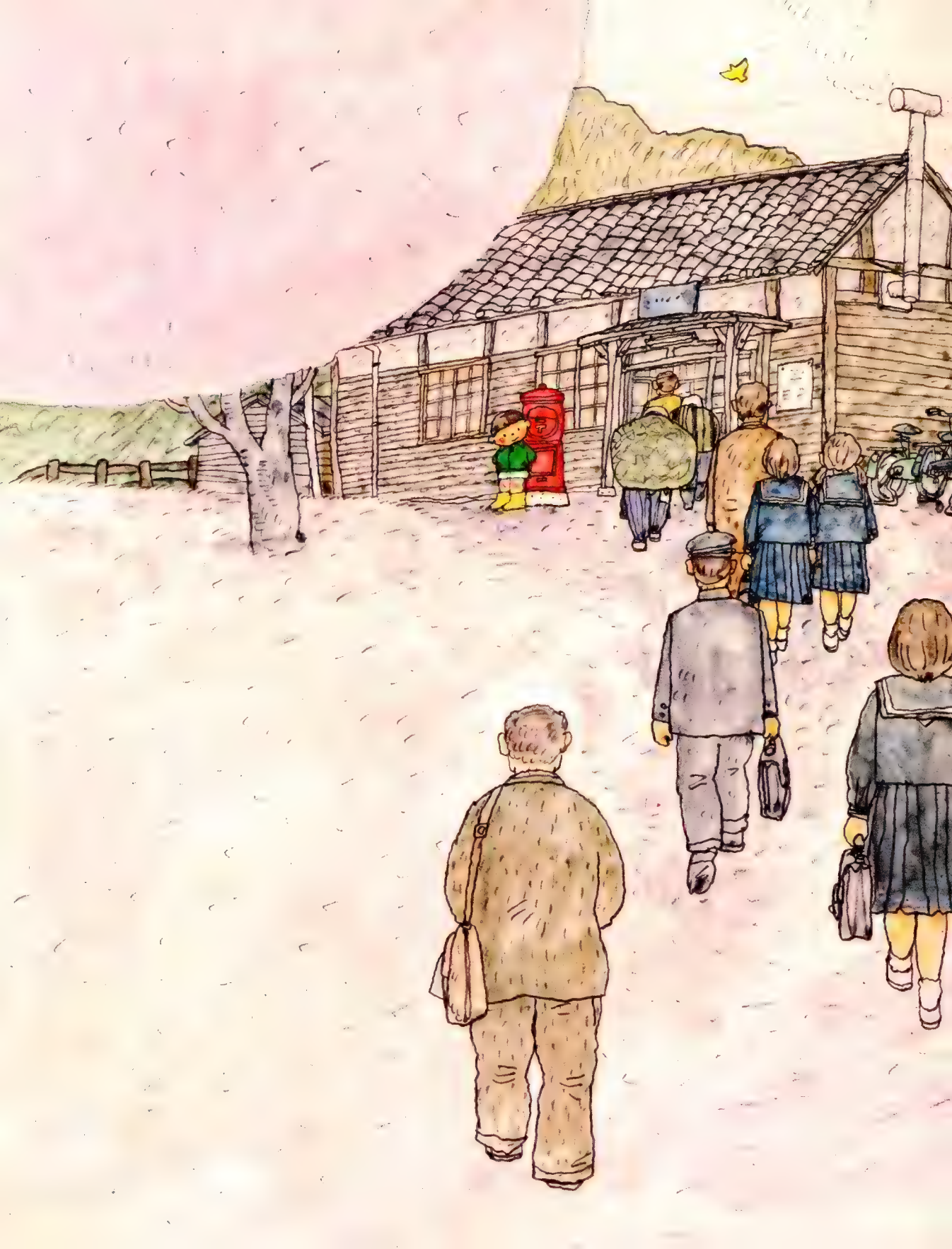
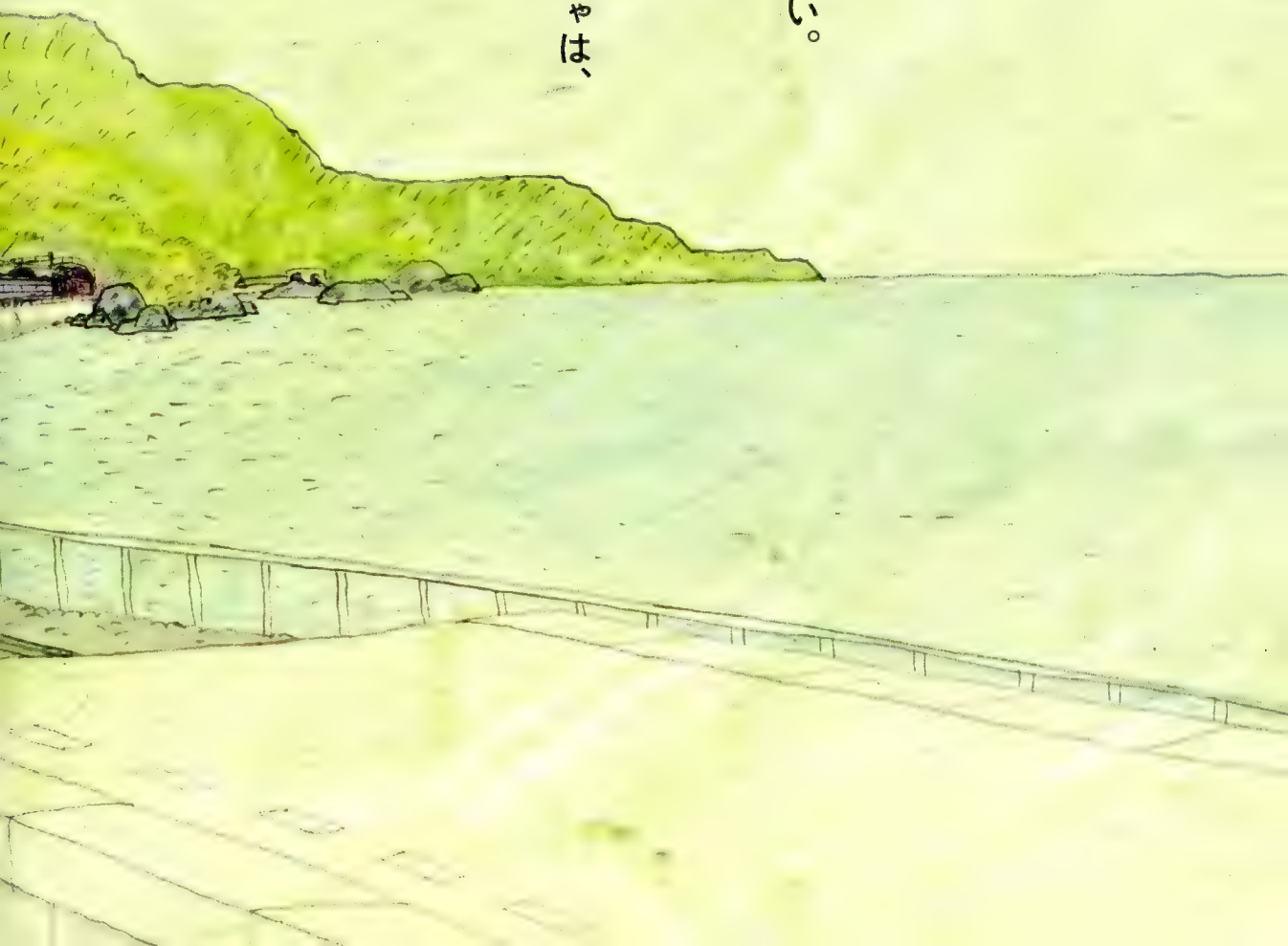
鶴見正夫 ぶん
倉石琢也 え

鶴見正夫 ぶん
倉石琢也 え

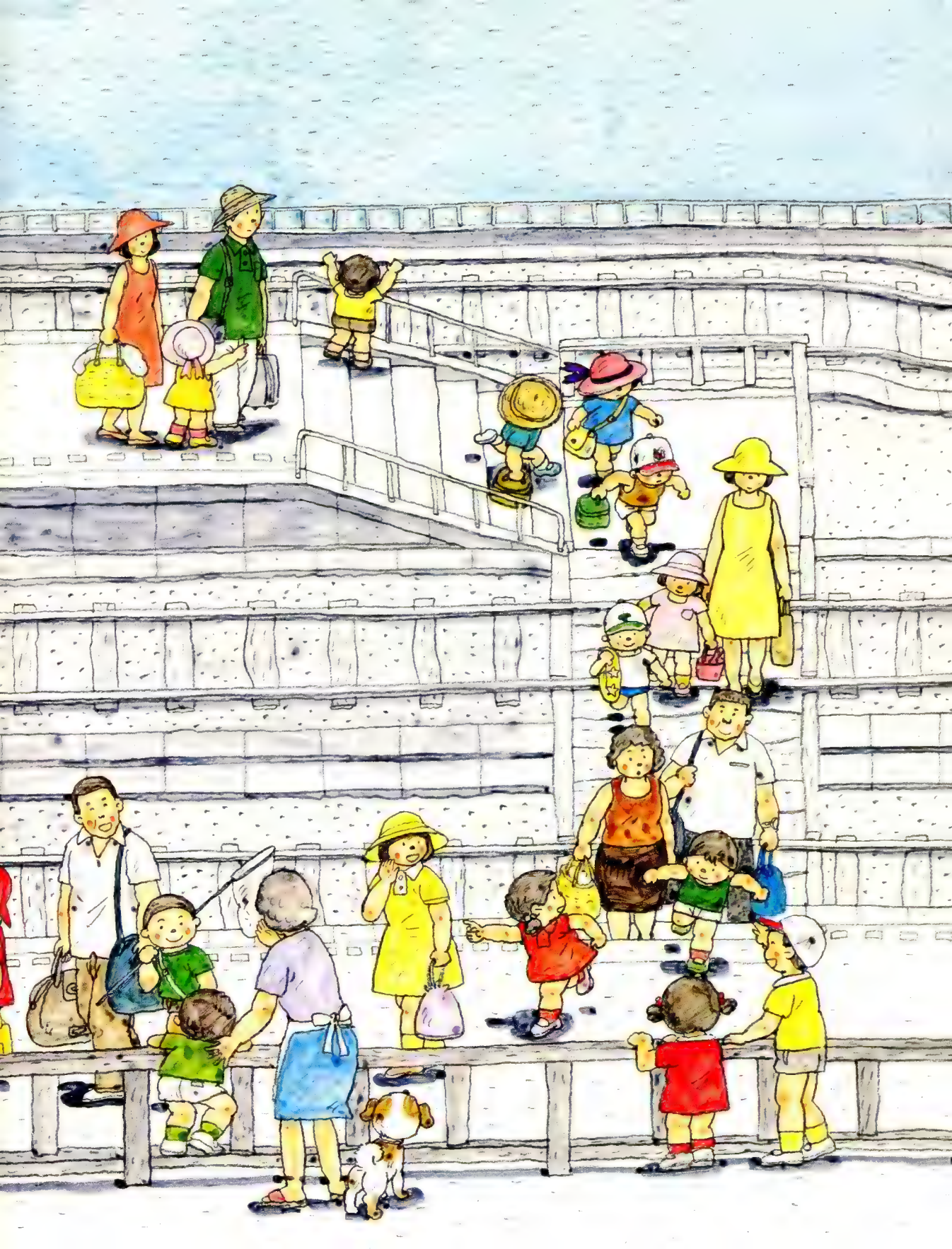
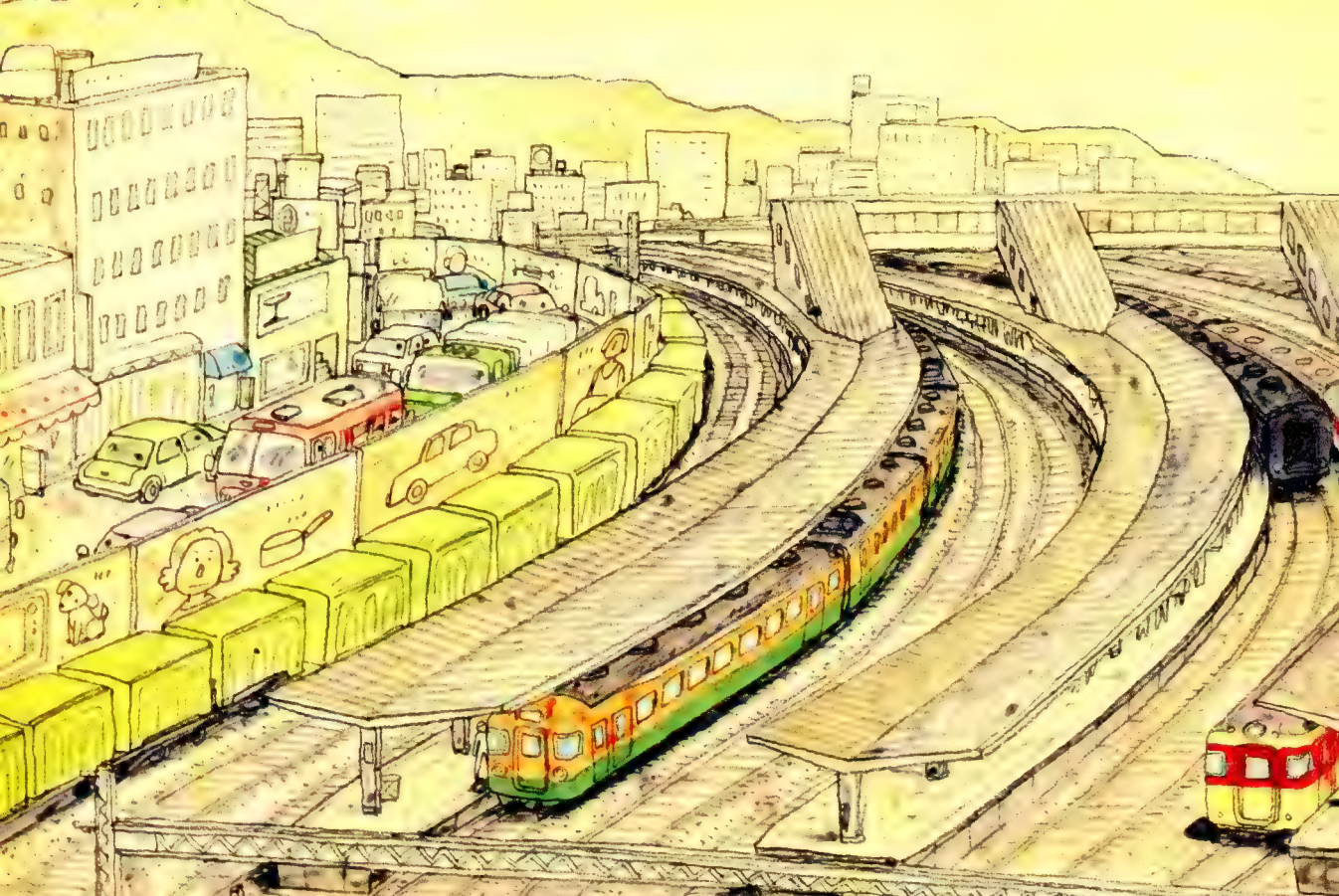
小 峰 書 店

ぼくの　なまえは、ゆうき。
ぼくの　うちは、おかの　うえだ。
うしろは　やまで、まえは　うみ。
うみの　そばの　せんろを
れっしゃが　はしる。
なみの　しぶきを　あびそうに　なって、
一にちに　四十ぽんも
れっしゃが　はしる。
　ピィ――、ファ――ン。
　カタタン　ダタタン。

えきは、ふるびた　えき。
ちいさな　えき。
えきいんさんは、たった　三（さん）にん。
だけど、だいすきな　えき。ぼくの　えき。
「あっ、とっきゅうれっしゃ。のりたいな。」
とまらない、よそみも　しない。
ビュ――ン、ゴォ――。
とおりすぎて　いく。

きたぐに

おしょうがつ――。
ぼくは、おとしだまを　もって　えきに　いった。
まどぐちで　せのびして、
「とっきゅうの　とまる　えきまで
きっぷ　ちょうだい。」
「おや、ゆうちゃん。
だれと　まちへ　いくの。」
「ううん、どこへも　いかないの。
きっぷだけ　ほしいの。」
えきいんさんは　へんな　かお。
でも、「いいよ」って、
うって　くれた。

ほしかった　きっぷ。
じぶんで　かった　きっぷ。
きっぷを　にぎって
かいさつぐちに　たったら、
からだじゅうが
カタタン　ゴトトン、
カタタン　ゴトトン。
とっきゅうれっしゃに
のった　ような　きもち。
「はやく　れっしゃが
こないかなあ。」

それから　ぼくの　ぽけっとには、
いつも　たからものの　きっぷが　一まい。
ゆきが　きえて、はるが　きて、
なみの　おとが、
とっても　しずかに　なった。
あさ　はやく、えきに　いってみた。
まちの　こうばへ　いく　ひと。
がっこうへ　かよう　ひと。
とれたばかりの　さかなを
うりに　いく　おばさんたち。
「もう　すぐ、どんこうれっしゃが
やってくる。」

かいさつが　はじまった。
どんこうれっしゃが　みえた。
「あっ。」
おくれそうに　なった　こうこうせい。
「はやく、はやく。」
よかった、まに　あった……。
みんなを　のせた　どんこうれっしゃは、
ピィ――！
うみべの　とんねるに
きえていった。

いい　てんき。
ひるすぎの　えきに　いってみた。
おきゃくさんは、ひとりも　いなかった。
「ゆうちゃん、あそぼう。」
ともだちが　かけてきた。
そうじを　していた　えきいんさんが
おしえてくれた。
「もうじき、のぼりと　くだりが
いっしょに　くるよ。」

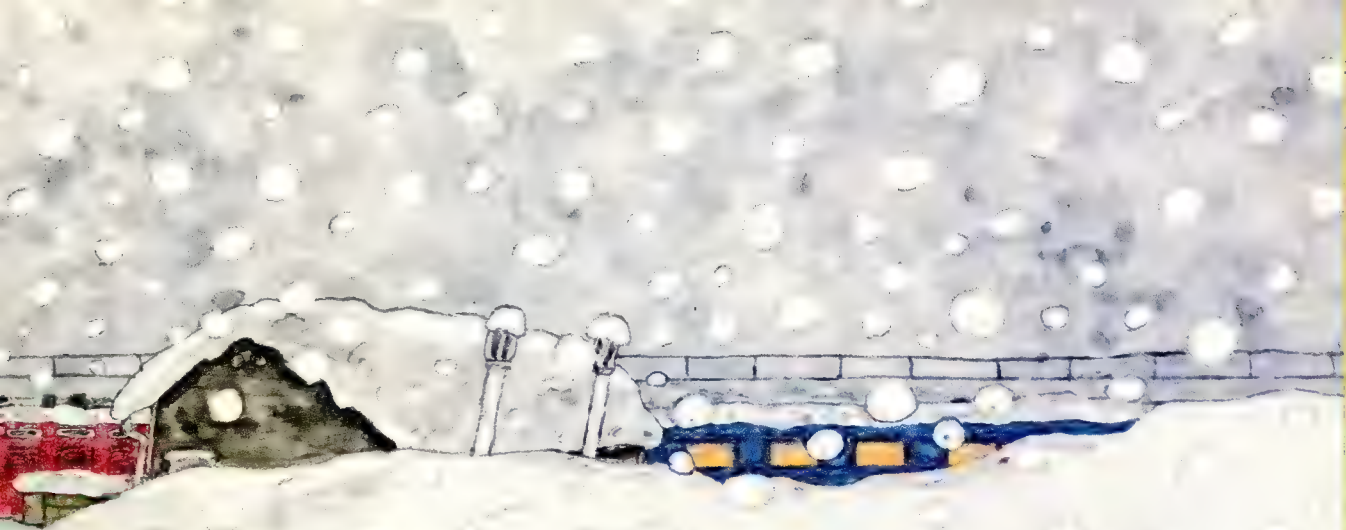
えきの　さくに　もたれていたら、
きた　きた、のぼりの　れっしゃが　みえてきた。
きた　きた、くだりの　れっしゃも　とんねるから　かおを　だした。
あっと　いうまに　えきに　きて、ビューン、ゴォー……、すれちがって　いった。
どちらも　きゅうこうれっしゃ。ちいさな　えきには　とまらない。
「つまんないや。はまへ　いって　あそぼ。」
ともだちは　いってしまった。
ぼくだけ　のこった。
「こんどは、とっきゅうが　とおるんだもん……。」

そうじを　おわった　えきいんさんが
ホームへ　でていった。
　ファ——ン！
きた　きた、とっきゅうれっしゃが　やってきた。
　ビュ——ン。
　ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ。
ものすごい　スピード。
きゅうこうも　とっきゅうも　とまらない。
ぼくは、きっぷを　ぎゅっと　にぎった。
「おおきく　なったら、
きっと　とっきゅうの　うんてんしに　なろう。
スピード　だして、
つっぱしるんだ。」

なつが　きたら、きゅうに
えきは　いそがしく　なった。
かいすいよくの　ひとで
まいにち　にぎやか。
ぼくんちにも　とうきょうから
おじさんが　きたよ。
とっきゅうで　まちまで　きて、
そこから　どんこうれっしゃに
のりかえて　きたんだって。
おじさんが　かえる　ひ、
おとうさんが　いった。
「ゆうちゃん。おじさんを
　まちまで　おくって　いこう。」
ぼくは、とびあがって　よろこんだ。

まちの　えきに　いったら、おどろいた。
「なんて　おおきな　えきだろう。」
かもつれっしゃが　とまっている。
からの　きゃくしゃが　やすんでいる。
ホームは、おきゃくさんで　いっぱいだ。
とっきゅうれっしゃが
すべるように　はいってきた。
「ゆうちゃん。こんど　これに　のって
あそびに　おいで。」
「うん、おじちゃん。ぼくね、
とっきゅうの　うんてんしに　なるの。」
おじさんが　のったら、
もう　はっしゃの　ベルが　なった。

あきが　きたら、えきは
また　さびしく　なった。
つめたい　かぜが　ふいて、
きのはが　ちらちら。
たからものの　きっぷも、もう　よれよれ。
なんだか、ぼくも　さびしくなった。
あるひ、ぽけっとから　だそうとしたら、
「あっ！」
きっぷは、はんぶんに　ちぎれてしまった。
「おこずかいは　ないし、どうしよう。」
ちぎれた　きっぷを　にぎったまま、
なきだしたく　なって　うちへ　かえった。

ぼくは　なんにちも、えきへ　いかなかった。
だけど　やっぱり　でんしゃが　みたい。
がまんが　できなくなって、えきへ　かけていった。
そしたら、とちゅうで　えきいんさんに　あった。
「ゆうちゃん、どうしたの。かぜでも　ひいていたの。」
「ううん……。」
「あした、おじさんは　おやすみだ。
だから　あさって、きっと　えきに　おいで。」
えきいんさんは、そう　いって、わかれていった。

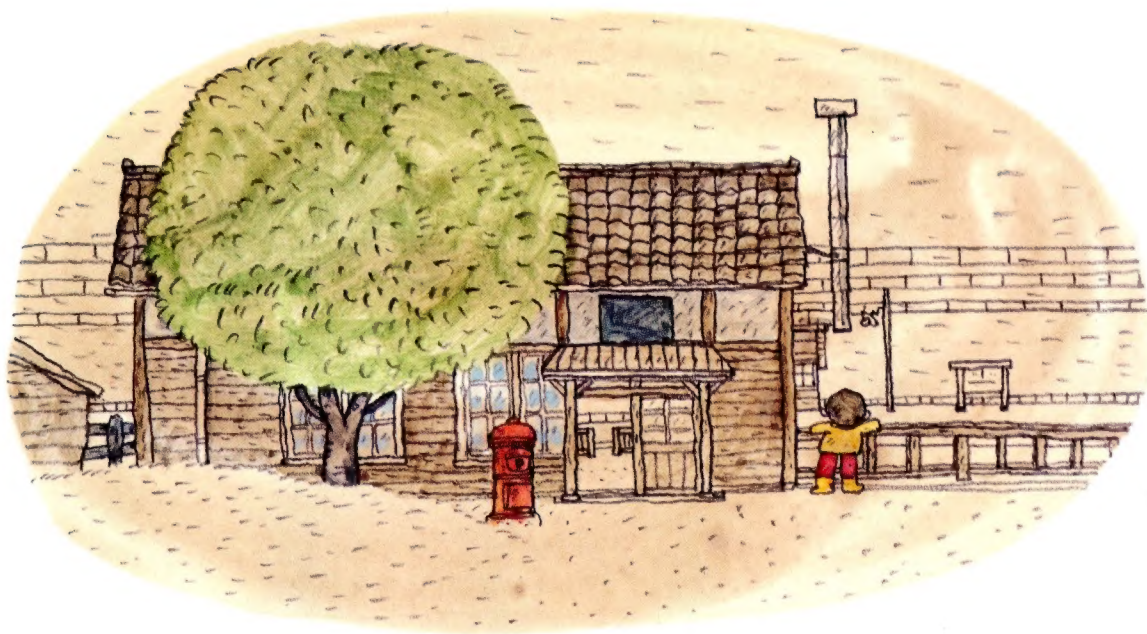
つぎの　つぎの　ひ。
ゆきの　ふる　ひ。
ぼくが　えきに　いくと、
えきいんさんは　まっていた。

「おう、ゆうちゃん。はい、プレゼント」。
ぼくは　びっくり。
だって、もらったのは、あたらしい　きっぷ。
まちまでの　きっぷ。
ぼくの　たからものが　ちぎれそうだったのを、
えきいんさんは　きっと　しっていたんだ。
「わあっ、ありがとう。」
そう　いったら、えきいんさんは、もう　ホーム。
どんこうれっしゃが　とまったんだ。
えきの　なまえを　よぶ
えきいんさんの　おおきな　こえ……。

おおゆきが　ふっても
「なんだ　ゆき、こんな　ゆき。」
あたらしい　きっぷを　もって、
ちぎれた　きっぷも　ぽけっとに　いれて、
ぼくは　まいにち　えきへ　いく。
あるひ、ぼくは　おもったよ。
（とっきゅうより　どんこうの　うんてんしに　なろう。
そうしたら　まいにち、この　えきに　とまれるもの。）
ゆきに　うもれた、ぼくの　えき。
どんこうれっしゃの　とまる　えき。
ちいさな　えきが、とっても　おおきく　みえたんだ。

ぶん＝鶴見正夫 （つるみ　まさお）

1926年新潟県に生まれる。早稲田大学卒業。詩人，児童文学作家。
おもな作品『日本海の詩』『あめふりくまのこ』『長い冬の物語』『鮭のくる川』など。

え＝倉石琢也 （くらいし　たくや）

1946年新潟県に生まれる。阿佐ヶ谷美術学園卒業。日本児童出版美術家連盟会員。
おもな作品『きんいろのあさ』『のはらにかがみがおちていた』『こちら事件クラブ』など。

どんこうれっしゃが　とまります　　**NDC　913**

1984年6月25日　第1刷発行©

発行所／小峰書店　160 東京都新宿区舟町6　電話357-3521　振替東京6-195544

組版／type＆たいぽ　印刷／斎藤印刷所　製本／昇栄社

Printed in Japan　　ISBN4-338-00609-9

どんこうれっしゃがとまります———のりものえほん 9／幼児～小学初級向

ISBN4-338-00609-9 C8793

小峰書店